琉球大学学術リポジトリ

夏の畜舎の衛生

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学農家政学部
	公開日: 2011-05-12
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 日越, 国吉
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19615

九、母竹の採取場所

竹林を傷めないで手軽に多数の苗を得るには竹林周辺に八の方法で新竹を発生させたもの、又は直接竹林周辺の新竹を堀り取る。又皆伐跡竹に発生した新竹を堀り取つて良い竹を選ぶ

土中に密に広がつている地下茎と竹
(林業新知識九月号より)

十、植え付け方

地下茎からタケノコ又はタケノコとなるふくらんだ芽や母竹がはがれると役立たない、苗を乾燥させない、植穴は苗より大きく深目に堀つて植え付けて土を軽くふみ固めて灌水し母竹苗を植え付ける場合は支柱をする。敷草をすれば乾燥が防げ、堆肥を植穴に施せば地下茎の伸びがよくなる。傾斜では地下茎の芽を上方に向けて植える。

十一、管　理

植え付けから成林するまでの二、三年間は春と夏に雑草を刈り払う。落葉や草は林内に放置して肥料に還元する。発生竹が細くなりだしたら夏の頃に一反歩当り硫安五—一〇貫又は人糞尿三〇〇—五〇〇貫を、うすめて二、三回に分けて施す。

十二、竹の伐採

竹を伐れば新竹を自然に発生するもので、竹の伐りすかし方や、立ておく竹の本数や年令等によつて新竹の発生する本数が増減したり、太くなつたり細くなつたりする。

太竹種は四—五年生、細竹種は二、三年生が材質がよく又それらの竹についた地下茎はそろそろ老衰期になるので残しても新竹発生数も少ないし細い、新竹には秋頃墨で記号を入れておくと年令が判る。毎年秋—冬に伐る。病竹や細い竹も伐る。一反当り伐り残す本数は太竹種五〇〇—一、五〇〇本細竹種一五〇〇—四〇〇〇本とし伐る本数はそれぞれ一〇〇—四〇〇〇、五〇〇—一五〇〇位とす。林内に雑草が繁茂するのは立てた竹数が少ない場合である。

十三、不良竹林の改善

不良竹林とは細く低い竹、老令の竹、病竹、等の多い竹林のことで林内には雑草が繁茂しておる。改善法は細竹や病竹や老衰竹を伐り除き若い元気な竹だけ残す。雑草は刈り払う。

枝張りの強い雑木は伐り除くか枝打ちする

生長の速い肥料木を混植する。竹林内の一部を竹の高さの½位の巾の帯状に皆伐して堀り起して堆肥を埋め込み二、三年してその部分が成林したらつぎつぎと繰り返してゆく。但し伐採方向は風の強い方向と直角方向にする。過湿地は排水溝を掘る、琉球には放任されたり、伐り過ぎたり、乱伐されたりした不良林が多いのがそれ等の改善が速に行われることが望ましい。

十四、竹林の拡がりを止める方法

竹の根が農耕地へ侵入することを懸命していては竹林栽培の意欲は起きない。竹の根の拡がりは竹林の拡がりを防止せんとする周辺に溝を堀つて石を入れておけば根の拡がりは完全に止まる。

（大山保表）

夏の畜舎の衛生——

現在沖縄で飼養されている家畜の品種に大方もつと非の方の国が適地であり又それ等の地方に多く飼はれ、よりよい生産能力を発揮している。要すれば此等の家畜には沖縄の夏は暑過ぎる上蚋蝿、蚊その他の昆虫類にも刺し悩まされ通しで最良の能力を発揮し難い環境下に在るので夏期は此の点に想ひを馳せ家畜の管理に親切でありたい。

吾々に生鮮な乳、肉、卵を供給する一方弗を獲得し労役を提供してくれる家畜の能力を夏期にも減退させない為には飼料の種類や配合調理法に考慮を払ひ手入れにも一層注意すべきであるが畜舎内での生活を夏中如何に快適に過ごさせるかに努力が要る。

夏の畜舎の衛生は要すれば、明るくて、涼しく清潔で乾いて居り、蝿、蚊その他の昆虫のうるささから彼等を解放することである。

斯うすることが家畜の生産能力を維持向上させ、更に肥料価値の高い自給肥料をより多く生産する事ができ延いては耕種農業からの増収を遂げさせる基盤になる。

さて衛生的見地から見ての沖縄農村での畜舎改善の要点を挙げて見ると、

一、畜舎の位置方向

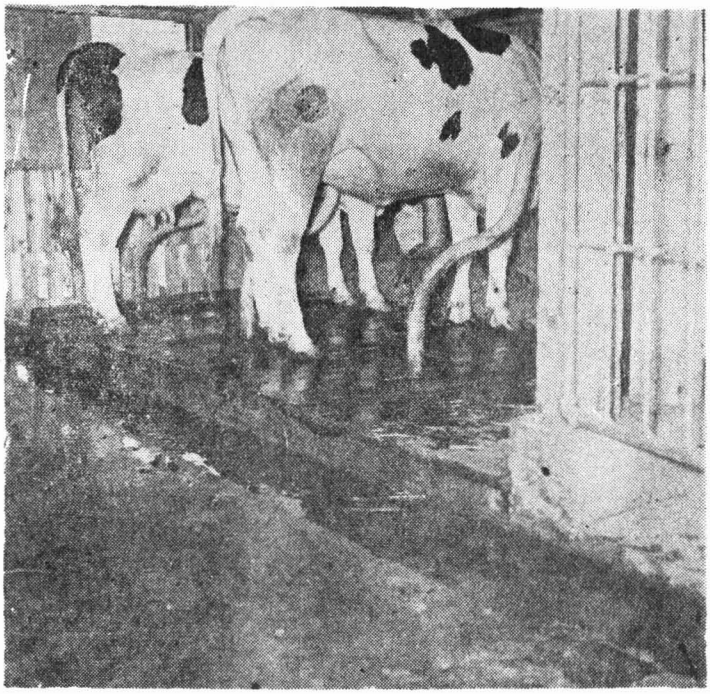
現在も余り変りないが、戦前は屋敷の向きはどうであろうと畜舎は門を入つて直ぐ左に位置し、豚舎は一番左奥で住居の裏にあつたが、これは夏の強い日射を避けると共に夏に多い東南風を充分に通すように東南向きに建てるべきである。現在建つている畜舎もこの趣旨に叶ふよう改造させ度いと思う。耐風的建物を建てるなら西と北側は山で東南の開けた小高い土地が得られれば明るく、涼しく、雨天にも濡らないから理想的畜舎位置と云へる。

二、舍内の明るさ

他の畜舎では左程でもないが特に牛舎は戸口に莚を垂れ八方を密閉して暗黒にさせて置く習慣がある。普通の牛が健康を保つ為必要とする空気の量は一時間二、六〇〇立方呎と云はれるが、これは一昼夜に高さ二十尺建坪五〇坪のビルに相当する量の空気が要る程である。密閉された畜舎内の空気は吐き出される水蒸気と炭酸ガスに汚れ更に糞尿の発酵分解から生じたアンモニヤその他の悪臭、それに体表から発散される体熱で温められた蒸し暑い空気が充満停滞して居て人は十数分と長く居れない状態の下に牛は不衛生的生活を強制させられている為食慾は減退活力も衰退するので予期の成績は挙げ得られないのである。速かに四方を解放してやるべきである。農家は此の暗黒飼育の理由として刺蠅から守る為だと説明しているが、これは防虫金網を張つて防いで行きたいものである。金網張りの畜舎は風通しの悪い所では幾分暑くなるが、湿気の方法を考へてやれば良くなるのであろうこの金網張りを完全にすることによつて豚伝染病や山羊の腰麻痺予防の一助ともなろう。

三、舍内を乾燥させること

厩肥を早く腐熟させようとして敷藁を畜舎内に入れ糞尿を吸はせて家畜に踏ませるが此の為時々田圃のようになつている畜舎さえ見受ける。斯くして堆積した厩肥に更に水肥を掛けている向れも大切な窒素分を揮散させる結果としかならない。時にはこれに木灰を振り掛け一層窒素分の追ひ出しをやつている人さえ見受る。心すべき事である。



厩肥中の窒素の損失防止策としては第一に糞尿の分離をやるべきである。即ち畜舎内では尿を直ちに尿溝から尿溜に流し込み、糞と混ざらん様にする事である。家畜糞と云うものは口中では強大な歯で咀嚼され更に長い消化管内で色々な消化液の協力を得ても尚不消化で吸収出来ずに排泄された飼料の粕である。これを堆積醗酵させ耕地に施肥しても全肥料成分が分解し作物根から吸収されるには三、四年もかゝるような極く遅効性の肥料である。一方尿の方は二日飼料中の養分が消化吸収されて体内の各組織器官を養つた後の老廃物が尿中に排泄されたもので代謝の分解物である。糞と尿とは全く性質が違うのである尿中の窒素分は気温が高い場合は短日時に分解アンモニア態となつて揮散する傾向があるので、糞と共い推積する場合は発酵熱の為尿中の窒素分は大部分失はれる事になつて終ふのである

これを泡盛に例を取ると尿は泡盛で、糞は酒粕（カシゼー）に相当する。この『泡盛とカシゼーを一緒にして醗酵させたらどうなるか』、答は解り切つた事である。糞は汚れた敷草と一緒に出来る丈け毎日畜舎から取り出し堆肥舎に積み出し、尿は家畜から排泄されると直ぐ尿溝から尿溜に流れ込むように設備すれば肥料成分の損失を最少限度に防ぎ、畜舎も家畜も汚れず綺麗で、伝染病、皮膚病、蹄腐れその他の病気から家畜を防ぎ得る。綺麗な家畜には家族全部に愛畜心を湧き出させる事になり一家のなごやかさが一層深まることになる。

家畜から排泄される全窒素分が糞と尿に含まれる割合は稍々似ているが濃厚飼料を与える場合は尿中の窒素分は糞の含量よりも遥かに多くなつて来るのであるから濃厚飼料給与の家畜の尿など一層糞尿分離に注意すべきである。

豚舎の排尿溝は一頭分毎に豚房外の排尿溝に流れるよう注意が要る。これは伝染病並寄生虫症の隣接伝染を防ぐ為である。

四、畜舎の広さ

或前の古い畜舎には在来種が飼はれていた時代そのまゝの狭い小さい畜舎が残つていたりして、改良されて大きくなつた牛馬は室内で回転が出来ず、豚は横になると鼻孔が前の壁につかえてさぞ呼吸も暑苦しかろうと思われるものがあつた。それに牛馬は左右に振り繋がれ通しの為、牛の鼻は変形して曲り馬は悪癖（ユルジ！）とかさく癖（ゲーゲー）やら色々の悪癖が多かつたものである。これを狭くとも九尺四方出来れば二間四方にし舎内では性質の荒い雄牛の他は放し飼いにして欲しいものである。普通家畜は自由にさせると暑さ寒さによつて自ら好きな場所を選んで立ち、寝る時は汚れを避けて横臥するから畜体も汚れが少いのである。乳牛では繋ぐより放し飼いの方が乳の出し方がずつと多いと云う報告がある。

畜舎から引き出されては暑熱の中を一日中追い使われる家畜

に少くとも寄内丈けでも精一杯の自由を与えのんびり思うまゝの休養を与えて欲しい。

家畜にも暑さ寒さを感じ快適の気分を味う丈けの神経の持ち合せはある。住み心地よくすれば内臓器管の活動も活発となるから自然能力を発揮するようになるのである。

夏甘藍栽培の要点

（日越国吉）

甘藍は冷涼な気候を好むもので十二月から四月頃が長盛期で単価も五円乃至五〇銭でいとの安い価である。然し六月から十一月頃までは品薄で、十一月には単価が二〇円もする。価の高い時期に出荷するには、夏の高温乾燥期に栽培せねばならないので、甘藍の性質上不適当な時期であるが最近では、耐暑性の葉漬種が出来て夏の甘藍栽培が比較的容易に行われるようになつた。

一、育苗

サクヤツシヨン、長岡交配等は九月以降播種されて居るが、葉漬は特殊な性質をもち、平均気温十七、八度で花をつけ十月以降はの播種では全然結球せず抽苔する。葉は夏の高温に対しては強いが低温には敏感な為、播種期は四月から八月頃にかけて行わねばならない、収穫期は大体播種後一〇〇日頃より始められるので、十月から十一月の収穫を目標にするには七月に播種すればよい。

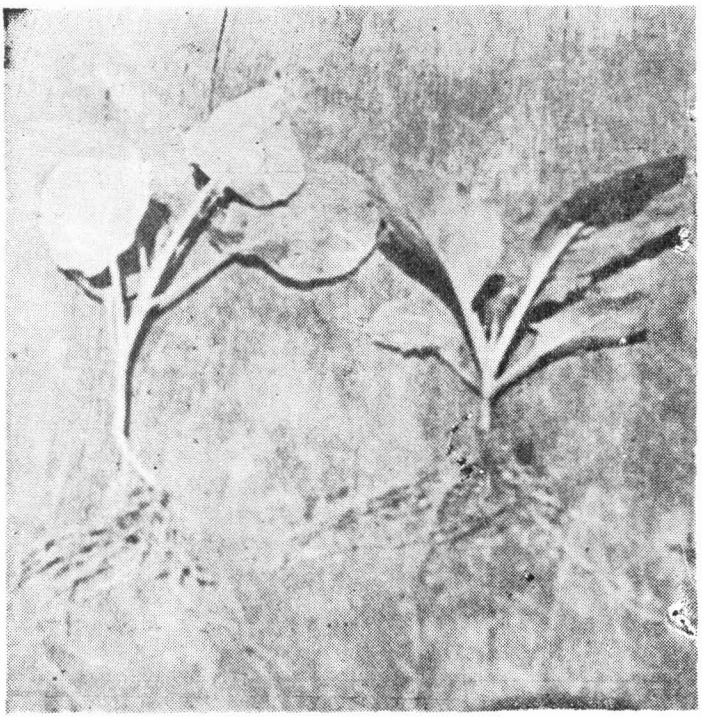
播種床は管理の便宜上住家に近い所で、畦巾四尺、通路一尺高さ二、三寸の平床をつくる。尚少量播く場合は箱播にすると便利である。箱は長さ二尺位、巾一尺二寸、深さ三寸位の平箱に造り床土をつめこむ。

播種箱、一、篠板　二、播種後砂で覆土したところ。

畜舎に金を掛ける必要はないがコンクリート床としつかりした水肥溜は欲しい。後は丸太の柱に茅の屋根でも結構である。但し一頭分の広さを九尺四方以上と云う事を忘れずに。

床土は二週間程前によく腐熟した堆肥を坪当り二、三貫施し床土とよくかき混ぜて、土塊を細く砕く。こいしの多い土地では四寸目位のふるいで床土の厚さ三寸位ふるえば良い床土となる。床面は水平に均し、軽く鎮圧して、二寸間隔に篠板で播溝をつくり、一分位の間隔で播種する。反当播種量は大体五勺位にして播種床二坪を要する。

播種が終れば種子が見えない程度に覆土をするが、播種溝の側の土を指先で静かに種子の上にかぶせることもよい。又砂をふりまいてもよい。覆土した後は敷藁をしてその上より出来得る丈細目の如露で静かに灌水する。



一回移植苗（左）葉柄、節間が細長い不良苗（右）良苗